クラシック音楽のテーマに基づく3つの話

鍵盤をめぐる3話

Keyboard

18世紀には様々な鍵盤楽器があった。金属の小さな棒で弦をつつくクラヴィコード、鳥の羽根の軸ではじくチェンバロ、ハンマーで叩くフォルテピアノなどそれぞれ発音の仕方は異なるが、どれも他に代えがたい魅力がある。

1 CPEバッハの真夜中のクラヴィコード

18世紀後半のイギリスの音楽史家バーニーが、1772年10月にバッハの息子のカール・フィリップ・エマヌエルをハンブルクに訪ねた時のことを『音楽見聞録』(春秋社)に綴っている。優雅な夕食でもてなされ、主人自らクラヴィコードによる即興演奏を聴かせてくれた。バッハの音楽への没入度は凄まじく、目は虚空を見つめ、時に興奮し…、演奏は深夜11時まで続いた。「近所迷惑?」と思われるかもしれないが心配ご無用。クラヴィコードは世界一音の小さな楽器といわれているからだ。実際、日本の家屋で激しく弾いても隣の部屋にはまったく聴こえない。絶対的な音量こそ小さいものの、柔らかなサウンドは聴き手の肌にじんわりと浸み込むかのよう。繊細で多彩な表現が可能でヴィブラートもかけられる。でも周囲は静かでなければならない。それも電気ノイズが気になるほどの。蝋燭の灯りがふさわしいが、これはチェンバロやフォルテピアノにも言える。

2 修道院に響くチェンバロ

ある年の初夏にフランス、アルザス地方のコルマールに出かけたときのこと。中世やルネサンスの家々が立ち並ぶ絵のように美しい町には、当地の古い修道院を利用した博物館があり、17世紀のチェンバロの名器ルッカースが展示されている。その楽器で家喜美子(いえきよしこ)さんが録音するというので立ち会ったのだ。昼間はグリューネヴァルトの《イーゼンハイムの祭壇画》等の名画を目当てに大勢の観光客で賑わうので録音は日没から深夜まで。立会人は数名の関係者のみ。やはり電気ノイズを避けるために明かりは楽器の周囲にごく僅か。中世の宗教美術に囲まれた石造りの院内にバッハや17世紀の音楽が鳴り響く。そのとき筆者は初めてチェンバロの本質に触れたと思ったものだ。今でも家喜さんのCD「涙のパヴァーヌ」(レグルス)を聴くと当時の記憶がまざまざと蘇ってくる。

3 フォルテピアノ奏者は大変

個人的な話で恐縮だが、我が家にはフォルテピアノ奏者が一人いる。拙宅にプラハのヴァイメス(1811年製)が来たときの話。オランダの修復家が東欧の田舎のどこかの納屋で見つけ、修復してくれたのだ。アクションは現代のピアノとは別系統のウィーン式で6オクターヴ。膝梃(ひざてこ)式ペダル(膝で押し上げる方式)はダンパーと柔らかな響きになるモデレーター。1811年といえばナポレオン戦争ただ中。歴史の生き証人みたいなもので、この楽器が来た頃は夜中に何度か亡霊を見たような気がして怖かった。ほぼ百パーセント木製で平行弦(現代ピアノは交差弦)なのでダンパーを用いても響きが濁らないし、小さな木片に薄い革を巻いただけの軽いハンマーが弦を打つと人のお喋りのように聴こえる。この楽器でベートーヴェンやシューベルトを弾くとまさにサイズの合った服を着たようなぴったり感がある。これぞフォルテピアノの醍醐味なのだが、残念なことも。より音域のひろい曲は鍵盤が足りないので弾けないし、作品のスタイルと楽器の響きが合わないと酷い違和感を覚えるのだ(その点モダンのピアノはどんな曲でも弾ける)。かくしてフォルテピアノ奏者は複製も含めて次々と楽器を増やしていくことになる。シューマン、ショパン、それ以前のモーツァルトのピアノ…。しかも一つ一つが大きくて場所を取るし、湿度や気温の変化に極度に弱いので生活は楽器中心。コンサートや録音には会場に運ばなければならず…。フォルテピアノ奏者は大変なのだ。

文/那須田 務

アントン・ヴァルター・モデルのフォルテピアノ

鍵盤をめぐる紀尾井ホール公演

マクシム・エメリャニチェフ 3種鍵盤 モーツァルト・リサイタル

11/6(日) 14:00

[使用楽器]
モダンピアノ　：スタインウェイ
フォルテピアノ：アントン・ヴァルター・モデル
チェンバロ　　：ミートケ・モデル

[曲目] オール・モーツァルト・プログラム
幻想曲ハ短調 K.475(フォルテピアノ)
ソナタ第14番ハ短調 K.457(フォルテピアノ)
ソナタ第16番ハ長調 K.545(チェンバロ)
ロンド イ短調 K.511(フォルテピアノ)
ソナタ第18番ニ長調 K.576(モダンピアノ)

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。